

児童の学習意欲に関する研究 (1)

—— 児童の学習意欲に及ぼす母親の養育態度の評価の効果 ——

今 林 俊 一

(1987年10月12日 受理)

A Study on Academic Achievement Motivation of Children (1)

—— Effects of Evaluations of Mother's Child-rearing Attitudes
on Children's Academic Achievement Motivation ——

Shunichi IMABAYASHI

1. 問題と目的

児童生徒の学業達成の面では、個々人の適性に合った教育プログラムの採用がこれまで強調されてきている。その適性には、児童生徒の知能や基礎学力、教師・友人・親との接し方、家庭や地域社会によって強化される慣習・態度に加えて、児童生徒自らの興味関心や動機づけ、目標に対する期待などが重要なものと考えられている。特に、児童生徒自らの興味関心や動機づけなどは、他の適性を十分に機能させようかどうかの働きを担うために、これまで、多くの研究がなされている。しかしながら、これまでは、目標追求に対して教師や親などから与えられる報酬や罰の差異の効果などを中心とし、興味や動機づけを外的な要因で操作しようとする研究が多かったのに対し、児童生徒自らの主体的な学習活動や学習意欲といった内的な要因を操作する研究は、多かつたとはいえない。このことについて、下山ら(1982¹⁸⁾)は、「個人に内在する動機を客観的に測定すること及び操作することの困難さ」と「用いられていることばのあいまいさや多義性」で説明している。

本研究は、教育の場で多用されている学習意欲をめぐる諸問題の解決を目指すという観点から、まず、学習意欲の規定因や発達・育成を検討しようとするものである。なお、学習意欲の概念については、達成動機づけの概念にかなり近いもので、教室での学習活動に関係する要因を加えたものとしている下山ら(1982¹⁸⁾)の考え方に準拠する。その考え方は、学習意欲の特性を、「自律性、自発性、価値志向性を重視する」ことから、暫定的な定義づけとして、「学習意欲とは、種々の動機の中から学習への動機を選択してこれを目標とする能動的意志活動を起こさせるもの」としている。

* 本研究の一部は、1987年日本教育心理学会第29回総会で発表した。
鹿児島大学教育学部心理学科

児童生徒の学習意欲や達成動機づけの発達や形成については、主に家族関係と密接な関係があるとされている (McClelland, 1961⁸⁾)。このことは、初期の親子関係に伴う感情的な要因が後の物の考え方や態度を規定するという理論的背景 (McClelland, 1961⁸⁾) と、また、自律訓練は達成動機の育成に貢献する (Winterbottom, 1958²³⁾) や高い達成欲求に関連する親の養育態度は卓越した基準の要求・あたたかさ・権威的でない態度などである (Rosen, 1959¹⁶⁾) などの実証的データに基づいている。これらのことから、達成動機づけや学習意欲は、環境的要因により育成されているといえよう。日本での追試研究では、前述の結果と必ずしも同じ結果は見出されていないが、親の養育態度と児童生徒の達成動機づけや学習意欲との間に有意な関連が認められており、達成動機づけや学習意欲の発達・形成になんらかの影響をそれらが及ぼしていることを示しているのである (林, 1967⁴⁾; 宮本, 1968⁹⁾; 奥野, 1968¹³⁾, 1973¹⁴⁾, 1978¹⁵⁾)。また、実際的な問題に関連性をもつ研究としての、幼児や児童の遊びに対する母親の態度と子どもの学習意欲 (中原, 1978a¹¹⁾, 1978b¹²⁾) や母親の子どもへの期待と子どもの達成動機 (前原, 1978⁷⁾) などにおいても、それぞれ関連が認められている。さらに、学習意欲を本研究の立場でとらえて、親の養育態度との検討を行っているものに、今林ら (1981⁶⁾)、遠藤 (1986¹¹⁾)、平川 (1987⁹⁾) などがある。その結果は、ほぼ一貫して、「親の保護的・服従的な養育態度のもとでは子どもの学習意欲は高い」、「親の支配的 (過剰期待) な養育態度のもとでは子どもの学習意欲は低い」とその関連性を報告している。

ところで、前述してきた研究は、親の側の要因としてとらえられる養育態度や認知像 (自己評価) の研究であるのに対して、児童生徒の親の養育態度に対する認知像 (他者評価) という児童生徒の側の要因の研究は、必ずしも多いとは言えない (山本ら, 1977²⁴⁾; 藤田ら, 1978²⁾; 藤田, 1978³⁾; 村山, 1979¹⁰⁾; 鈴木ら, 1980²¹⁾; 塚野, 1981²²⁾)。つまり、このことは、児童生徒が親に対してとる態度や反応の様相は、親が児童生徒に対して実際にとる養育態度によって規定されるよりむしろ、児童生徒が親の養育態度をどう認知 (評価) するかによって規定されるという親子相互交渉の視点からの研究方法論上の難しさが内包されていることを意味しているのであろう。しかしながら、この視点による研究は、親子相互交渉の中での児童生徒の行動変容のプロセスの理解だけでなく、児童生徒の欲求・動機といった情意面の理解や学習意欲をめぐる諸問題の解決にとっても必要かつ有効なものであろう。

これまで、親子相互交渉の視点に立った児童生徒の学習意欲の発達や形成の研究は、斎藤 (1981¹⁷⁾) による親の学業への期待についての子ども (中学生) 自身の認知の高さが子どもの学習意欲の高さと関連しているということや、平川 (1987⁹⁾) による親自ら見た養育態度よりも子どもからみた親の養育態度の方が学習意欲を規定する傾向にあるということなどが報告されているだけである。しかしながら、これまでの研究では、親の養育態度について、親子間の評価の違いによる児童生徒の学習意欲への影響は別々に検討されており、その評価の違いの影響を十分に反映しているとはいえないと思われる。

そこで、本研究では、児童の学習意欲の発達・形成を規定している要因の中で、親の養育態度、特

に、母親の養育態度について検討する。今回は、母親自身の養育態度の評価と子どもから見た母親の養育態度の評価それぞれを対応させ、その対応させた評価の一致・不一致などに基づいて5類型を構成し、各類型が児童の学習意欲に及ぼす影響について検討する。特に、以下の観点から、その影響を明らかにする。

(1) 母親の養育態度について、母親と児童間の評価がともに適応の型の児童とそれがともに不適応の型の児童の学習意欲の高低について。

(2) 母親の養育態度について、母親と児童間の評価に違いの見られる型の児童では、児童の評価が適応の型の児童とそれが不適応の型の児童の学習意欲の高低について。

2. 方 法

2.1. 被験者

鹿児島市内の小学校の3~4年生、計292名（男子147名、女子145名）とその母親（292名）。

2.2. 調査期日

1986年9月。

2.3. 調査場所

児童は、それぞれの教室において、担任教師が実施した。母親は、各家庭において実施した。

2.4. 調査材料

2.4.1. 学習意欲の質問紙

下山ら（1983¹⁹⁾の作成した学習意欲検査のGAMI（8要素40項目）を使用した。8要素は、「自主的学習態度」、「達成志向」、「責任感」、「従順性」、「自己評価」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」から構成されている。

2.4.2. 親子関係の質問紙

品川ら（1972²⁰⁾の作成したTK式診断的新親子関係検査（以下、親子関係検査）、親用・子用を使用した。この親子関係検査は、10領域（「不満」、「非難」、「厳格」、「期待」、「干渉」、「心配」、「溺愛」、「盲従」、「矛盾」、「不一致」）80項目から構成されている。

2.5. 手続き

学習意欲の質問紙は、児童の所属する教室内で担任教師によって実施した。質問紙の応答は、各項目に対して、「とてもよくあてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階で評定させ、それぞれに、4・3・2・1点を与え

た。

親子関係の質問紙は、手引きの実施法に従って実施した。子用は、児童の所属する教室内で担任教師によって、強制速度法で行った。親用は、児童の各家庭において、母親が回答記入後、児童を通して、教室で担任教師が回収した。質問紙の応答は、各項目に対して、「ぴったりあてはまる」、「だいたいあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「ぜんぜんあてはまらない」の4段階で評定させ、母親の子どもに対する態度や扱い方の問題傾向の低い方から、4・3・2・1点を与えた。

2.6. 処理

学習意欲の得点として、各要素ごとの項目の合計得点、「P得点」、「N得点」および「総合得点」を求めた。「P得点」は、学習意欲の積極的・促進的側面を表わす5要素（「自主的学習態度」、「達成志向」、「責任感」、「従順性」、「自己評価」）の得点の合計であり、「N得点」は、学習意欲の消極的・抑制的側面を表わす3要素（「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」）の得点の合計である。「P得点」は、得点の高いことは促進傾向が高いことを、また、「N得点」は、得点の高いことは抑制傾向が高いことを意味している。「総合得点」は、「P得点」と「N得点」、すなわち、8要素の得点の合計である。ただし、「総合得点」の算出にあたっては、「N得点」を逆転して計算（75点-N得点）しているので、「総合得点」は、学習意欲の強さを示しているのである（「総合得点」=「P得点」+（75点-N得点））。

親子関係検査は、各領域ごとに合計得点を求めた。各領域とも合計得点が高くなるほどいろいろな種類の問題傾向は少なく、望ましい養育態度であることを意味している。また、母親の子どもに対する態度の適・不適については、各領域ごとの得点を、手引きの換算表（母用・子どもからみた母）の「危険地帯」（1～19パーセントイル）、「中間地帯」（20～49パーセントイル）、「安全地帯」（50～99パーセントイル）に基づいて群分けし、順に、「不適応群」、「中間群」、「適応群」とした。さらに、母親と児童間の母親の養育態度の評価の違いを類型化する視点として、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方とをとりあげた。すなわち、母親の自己評価の水準と子どもの親に対する受けとめ方の水準との関係から典型的類型化として、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方が、適応的で同水準のもの（「適応=適応群」）、母親の自己評価が不適応的で子どもの親に対する受けとめ方が適応的なもの（「不適応=適応群」）、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方が、要注意状態で同水準のもの（「中間=中間群」）、母親の自己評価が適応的で子どもの親に対する受けとめ方が不適応的なもの（「適応=不適応群」）、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方が、不適応的で同水準のもの（「不適応=不適応群」）の5類型の設定が可能である。なお、5類型の表示は、「母親の自己評価の結果=子どもの親に対する受けとめ方の結果」を意味している。

3. 結 果

表1～表10は、母親の養育態度の領域ごとに、母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。

表1は、「不満」（子どもとしっくりいかない、子どもに対して不満がある、ムシが好かない、他の兄弟と比較してかわいくない、無関心、他のことにとらわれて放っておく、相手にならないなどの母親の子どもに対する態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「責任感」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=3.09, 3.94, 6.44,$

表1 「不満」における母子間の評価と学習意欲
（上段：平均値，下段：標準偏差値）

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	12.45 3.24	13.27 3.55	12.32 2.15	13.50 2.56	13.25 3.02	
達成志向	15.18 3.95	13.83 3.09	13.68 2.70	14.38 2.07	14.90 2.97	
責任感	15.09 2.59	15.83 2.23	15.16 2.25	14.50 2.39	16.27 1.93	F=3.09 *
従順性	14.27 2.28	15.57 2.87	15.20 2.81	14.75 2.49	15.41 3.00	
自己評価	14.36 3.23	13.87 2.62	14.52 2.29	14.13 2.36	14.74 2.65	
失敗回避傾向	11.18 2.04	11.93 2.92	11.36 2.51	9.38 3.16	10.07 2.75	F=3.94 **
持続性の欠如	13.45 2.42	12.90 3.13	12.36 1.78	13.00 3.25	10.81 2.80	F=6.44 ***
学習価値観の欠如	11.82 2.86	9.83 3.17	9.76 3.17	9.13 4.09	8.67 2.44	F=4.25 **
P得点	71.36 12.45	72.37 11.71	70.88 9.07	71.25 8.60	74.56 9.96	
N得点	36.45 6.25	34.67 7.42	33.48 5.13	31.50 9.12	29.55 6.42	F=6.56 ***
総合得点	109.91 15.25	112.70 16.56	112.40 10.49	114.75 15.72	120.02 13.22	F=3.70 **
人 数	11	30	25	8	121	195

+ p<0.10
* p<0.05
** p<0.01
*** p<0.001
(df=4,190)

表2 「非難」における母子間の評価と学習意欲
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	12.18 3.09	13.04 3.54	11.71 2.70	13.08 3.12	13.58 3.10	F=2.43 *
達成志向	14.45 2.81	14.08 3.06	13.44 3.29	14.77 1.92	14.92 2.81	
責任感	15.18 1.60	16.04 1.97	15.32 2.85	16.08 1.66	16.35 2.02	
従順性	13.82 4.29	15.38 2.84	14.35 3.19	15.15 2.15	16.07 2.40	F=3.39 *
自己評価	13.64 2.29	14.38 2.65	14.06 2.88	15.15 1.77	14.64 2.60	
失敗回避傾向	11.18 3.16	12.46 2.77	10.44 2.70	9.85 1.68	10.02 2.88	F=4.22 **
持続性の欠如	14.00 2.57	13.00 2.99	12.53 2.15	11.15 2.04	11.06 3.15	F=4.97 ***
学習価値観の欠如	11.73 4.41	10.00 2.64	9.68 2.70	8.23 2.35	8.83 2.59	F=3.86 **
P 得点	69.27 9.47	72.92 10.65	68.88 12.45	74.23 7.12	75.56 9.54	F=3.11 *
N 得点	36.91 8.64	35.46 6.10	32.65 5.10	29.23 4.09	29.91 6.86	F=6.44 ***
総合得点	107.36 17.63	112.46 12.28	111.24 14.44	120.00 9.93	120.65 13.87	F=5.17 ***
人 数	11	26	34	13	86	170

+ $p < 0.10$

* $p < 0.05$

** $p < 0.01$

*** $p < 0.001$

(df=4,165)

4.25, 6.56, 3.70; $p < 0.05, 0.01, 0.001, 0.01, 0.001, 0.01$; 全て, $df=4,190$)。また, 有意な差の認められた要素において, ライヤン法による平均対の比較を行った結果, 以下の類型間に有意差(5%水準)が認められた。

「失敗回避傾向」: 「適応=不適応群(以下, B群)」> 「適応=適応群(以下, E群)」。

「持続性の欠如」: 「不適応=不適応群(以下, A群)」>E群, B群>E群。

「学習価値観の欠如」: A群>E群。

「N得点」: A群>E群, B群>E群, 「中間=中間群(以下, C群)」>E群。

表2は, 「非難」(子どもをおどかしたり, 悪くいたり, 体罰やその他の罰を与えたり, どなりつけたり, 出ていけといたりなどの母親の子どもに対する荒っぽい態度)における母親と児童間

の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「自主的学習態度」、「従順性」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「P得点」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=2.43, 3.39, 4.22, 4.97, 3.86, 3.11, 6.44, 5.17$; $p<0.05, 0.05, 0.01, 0.001, 0.01, 0.05, 0.001, 0.001$; 全て、 $df=4,165$ ）。また、有意な差の認められた要素において、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差（5%水準）が認められた。

「自主的学習態度」：C群<E群。

「従順性」：A群<E群，C群<E群。

「失敗回避傾向」：B群>C群，B群>「不適応=適応群（以下，D群）」，B群>E群。

「持続性の欠如」：A群>E群，B群>E群。

「学習価値観の欠如」：A群>D群，A群>E群。

「P得点」：C群<E群。

「N得点」：A群>D群，A群>E群，B群>D群，B群>E群。

「総合得点」：A群<E群，C群<E群。

表3は、「厳格」（子どもの気持ちにかまわず、一方的に親の考えている枠に押し込もうとしそれから逃げることを許さない。常に子どもを監督下におき、きびしい命令と禁止でしぼるなどの母親の子どもに対する態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「従順性」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「P得点」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=4.01, 4.25, 5.21, 2.27, 5.16, 3.52$; $p<0.01, 0.01, 0.001, 0.10, 0.001, 0.01$; 全て、 $df=4,155$ ）。また、有意な差の認められた要素において、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差（5%水準）が認められた。

「従順性」：A群<E群，D群<E群。

「持続性の欠如」：A群>D群，A群>E群。

「学習価値観の欠如」：A群>D群，A群>E群。

「P得点」：A群<E群。

「N得点」：A群>D群，A群>E群。

「総合得点」：A群<E群。

表4は、「期待」（子どもに対して高い期待をかけ、子どもの能力や気持ちにかまわず親の希望する方向へ引っぱっていくなどの母親の態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「達成志向」、「責任感」、「従順性」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「P得点」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=2.04, 2.96, 2.92, 2.25, 4.10, 4.01, 2.06, 5.61, 3.90$; $p<0.10, 0.05, 0.05, 0.10, 0.01, 0.01, 0.10, 0.001, 0.01$; 全て、 $df=4,162$ ）。また、有意な差の認められた要素において、

表3 「厳格」における母子間の評価と学習意欲
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	11.90 3.68	12.90 3.21	12.32 3.00	12.12 2.86	13.45 2.67	
達成志向	13.52 3.26	14.20 3.77	14.22 3.22	14.12 2.89	14.47 2.69	
責任感	15.38 2.29	16.00 2.26	15.65 2.15	15.85 2.27	16.29 2.01	
従順性	14.28 3.57	15.10 3.14	15.08 2.52	13.67 3.03	16.08 2.53	F=4.01 **
自己評価	13.97 2.32	13.60 2.88	14.49 2.50	13.85 2.68	14.75 2.60	
失敗回避傾向	11.21 2.82	12.10 3.18	10.51 2.97	9.82 2.53	10.47 2.65	
持続性の欠如	13.72 2.83	13.10 2.23	12.65 2.60	11.67 2.90	11.24 3.14	F=4.25 **
学習価値観の欠如	11.38 3.24	10.10 2.47	10.24 2.78	9.09 2.50	8.73 2.54	F=5.21 ***
P 得点	69.03 10.62	71.80 12.41	71.76 10.77	69.61 9.76	75.04 9.04	F=2.27 +
N 得点	36.31 6.25	35.30 5.72	33.41 6.53	30.58 6.40	30.43 6.78	F=5.16 ***
総合得点	107.72 15.04	111.50 14.19	113.35 14.08	114.03 14.42	119.61 13.36	F=3.52 **
人 数	29	10	37	33	51	160

+ $p < 0.10$

* $p < 0.05$

** $p < 0.01$

*** $p < 0.001$

(df=4,155)

ライオン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差(5%水準)が認められた。

「責任感」: A群 < D群。

「従順性」: A群 < E群。

「持続性の欠如」: B群 > D群, B群 > E群, C群 > D群, C群 > E群。

「学習価値観の欠如」: B群 > D群, C群 > D群。

「N得点」: B群 > D群, B群 > E群, C群 > D群, C群 > E群。

「総合得点」: C群 < D群, C群 < E群。

表5は、「干渉」(子どもに失敗させないようにと、口うるさく指図したり、すぐに手をかしてやったりして、こまごまと世話をやき、子どもに責任をもたせて見守っていることのできないなどの母

表4 「期待」における母子間の評価と学習意欲
（上段：平均値，下段：標準偏差値）

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	14.33 3.51	12.09 3.53	12.04 3.04	13.13 2.10	12.84 3.03	
達成志向	11.33 2.08	14.91 3.53	13.71 3.32	16.38 2.07	14.21 2.97	F=2.04 +
責任感	13.00 5.00	15.64 1.80	15.36 2.72	17.50 2.20	16.06 2.01	F=2.96 *
従順性	11.33 4.62	15.00 3.82	13.93 2.98	16.25 0.71	15.27 2.73	F=2.92 *
自己評価	14.33 3.21	14.91 2.21	13.54 2.30	15.13 2.10	14.32 2.75	
失敗回避傾向	10.33 1.53	11.82 4.19	11.14 2.86	8.50 2.27	10.19 2.71	F=2.25 +
持続性の欠如	12.00 1.00	13.64 2.69	13.32 3.29	10.13 2.90	11.51 2.76	F=4.10 **
学習価値観の欠如	10.33 1.53	10.91 3.02	10.50 3.88	7.00 1.69	9.05 2.46	F=4.01 **
P 得点	64.33 16.07	72.55 11.71	68.57 10.92	78.38 5.48	72.70 10.26	F=2.06 +
N 得点	32.67 2.52	36.36 6.65	34.96 7.93	25.63 4.75	30.75 6.21	F=5.61 ***
総合得点	106.67 17.93	111.18 12.40	108.61 16.49	127.75 9.33	116.95 14.16	F=3.90 **
人 数	3	11	28	8	117	167

+ p<0.10
* p<0.05
** p<0.01
*** p<0.001
(df=4,162)

親の子どもに対する態度)における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「達成志向」、「従順性」、「自己評価」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「P得点」、「N得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=3.08, 2.57, 2.72, 5.06, 2.85, 3.09, 4.44$ ； $p<0.05, 0.05, 0.05, 0.001, 0.05, 0.05, 0.01$ ；全て、 $df=4,175$ ）。また、有意な差の認められた要素において、ライマン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差（5%水準）が認められた。

「従順性」：B群>C群。

「失敗回避傾向」：B群>E群。

「持続性の欠如」：B群>E群。

表5 「干渉」における母子間の評価と学習意欲
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	13.75 2.38	13.32 2.83	12.70 2.98	15.00 2.53	12.66 2.90	
達成志向	16.00 2.27	14.84 2.83	13.37 3.24	16.67 2.25	13.82 2.99	F=3.08 *
責任感	16.13 1.36	15.65 2.54	15.63 2.06	17.50 1.52	15.68 2.30	
従順性	15.63 1.85	16.29 3.10	14.26 2.33	16.33 1.63	14.73 3.10	F=2.57 *
自己評価	15.13 1.46	15.29 2.69	14.26 2.46	16.00 2.37	13.86 2.69	F=2.72 *
失敗回避傾向	9.63 2.67	12.32 3.29	11.11 2.14	10.00 2.37	10.02 2.62	F=5.06 ***
持続性の欠如	13.00 2.00	13.16 2.77	12.11 2.41	11.50 2.74	11.43 2.84	F=2.85 *
学習価値観の欠如	9.88 2.59	9.94 2.66	9.81 3.66	7.50 2.26	9.06 2.69	
P 得点	76.63 6.80	75.39 10.08	70.22 10.36	81.50 4.46	70.75 10.78	F=3.09 *
N 得点	32.50 5.32	35.42 6.77	33.04 6.37	29.00 6.87	30.50 6.00	F=4.44 **
総合得点	119.13 9.25	114.97 12.83	112.19 14.58	127.50 7.66	115.25 13.73	
人 数	8	31	27	6	108	180

+ p<0.10

* p<0.05

** p<0.01

*** p<0.001

(df=4,175)

「P 得点」: D 群>E 群。

「N 得点」: B 群>E 群。

表6は、「心配」(子どもの健康, 安全, 成績, 交友関係などに, 無意味と思われるほどの心配をし, そのため, むやみと手をかけ保護をするなどの母親の子どもに対する態度)における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果, 「自主的学習態度」, 「達成志向」, 「従順性」, 「自己評価」, 「P 得点」, 「総合得点」において, 5類型間に有意な差が認められた(それぞれ, $F_0=3.13, 2.73, 3.75, 5.15, 4.50, 2.54$; $p<0.05, 0.05, 0.05, 0.01, 0.01, 0.10$; 全て, $df=3,214$)。また, 有意な差の認められた要素において, ライヤン法による平均対の比較を行った結果, 以下の類型間に有意差(5%水準)が認められた。

表6 「心配」における母子間の評価と学習意欲
（上段：平均値，下段：標準偏差値）

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	----- -----	14.39 2.45	13.33 1.63	9.50 6.36	12.48 3.00	F=3.13 *
達成志向	----- -----	15.50 3.84	15.67 2.07	12.50 2.12	13.74 2.94	F=2.73 *
責任感	----- -----	15.89 3.03	16.67 1.37	17.50 0.71	15.63 2.15	
従順性	----- -----	16.78 3.23	16.33 2.07	14.00 4.24	14.56 2.92	F=3.75 *
自己評価	----- -----	16.28 1.96	14.67 2.80	11.50 4.95	14.04 2.54	F=5.15 **
失敗回避傾向	----- -----	10.83 3.49	10.00 3.46	7.50 2.12	10.64 2.81	
持続性の欠如	----- -----	12.28 2.63	10.67 1.75	11.50 0.71	12.04 2.82	
学習価値観の欠如	----- -----	9.50 2.85	8.83 1.72	9.00 1.41	9.57 2.99	
P 得点	----- -----	78.83 11.54	76.67 4.37	65.00 16.97	70.45 10.16	F=4.50 **
N 得点	----- -----	32.61 7.01	29.50 5.39	28.00 0.00	32.24 6.46	
総合得点	----- -----	121.22 14.55	122.17 6.88	112.00 16.97	113.21 13.94	F=2.54 +
人 数	0	18	6	2	192	218

+ p<0.10
* p<0.05
** p<0.01
*** p<0.001
(df=3,214)

「自主的学習態度」：B群>E群。

「従順性」：B群>E群。

「自己評価」：B群>E群。

「P得点」：B群>E群。

表7は、「溺愛」（ねこかわいがりで見さかいなく甘やかす。子どものこととなると判断抜きで味方になり、距離をおいて見ることも、指導することもできなくなるなどの母親の子どもに対する態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「達成志向」、「従順性」、「自己評価」、「P得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=2.68, 4.64, 2.38, 3.56$ ； $p<0.05, 0.01, 0.10, 0.01$ ；全て、 $df=4,161$ ）。また、有意な差の

表7 「溺愛」における母子間の評価と学習意欲
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	13.13 3.14	13.00 3.66	12.89 2.40	12.93 3.29	12.18 2.85	
達成志向	16.25 3.01	14.48 3.47	14.74 2.99	14.21 2.04	13.45 2.84	F=2.68 *
責任感	16.00 2.27	16.38 2.16	16.11 2.58	15.57 1.83	15.19 2.39	
従順性	16.88 2.70	16.57 2.42	15.63 2.96	14.00 3.62	14.15 3.10	F=4.64 **
自己評価	15.00 3.12	14.90 2.77	14.83 2.38	14.79 2.12	13.65 2.53	F=2.38 +
失敗回避傾向	9.88 2.85	11.76 3.75	10.29 2.72	11.00 2.69	10.41 2.41	
持続性の欠如	11.88 2.36	13.33 3.26	12.09 2.79	11.79 3.24	12.16 3.02	
学習価値観の欠如	8.75 3.33	10.62 2.27	9.14 2.95	9.21 3.04	9.85 2.84	
P 得点	77.25 9.71	75.33 10.29	74.20 10.58	71.50 8.30	68.63 10.74	F=3.56 **
N 得点	30.50 7.31	35.71 7.32	31.51 6.57	32.00 6.91	32.42 6.24	
総合得点	121.75 14.13	114.62 13.86	117.69 14.82	114.50 13.42	111.20 14.60	
人 数	8	21	35	14	88	166

+ p<0.10
* p<0.05
** p<0.01
*** p<0.001
(df=4,161)

認められた要素において、ライマン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差(5%水準)が認められた。

「達成志向」: A 群>E 群。

「従順性」: A 群>E 群, B 群>E 群。

「P 得点」: C 群>E 群。

表8は、「盲従」(子どものいいなりになり、召使いのようにサービスする。子どもの顔色を気にして、叱るべき時でもピシヤリと言えず、子どもに振り回されているなどの母親の子どもに対する態度)における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「自主的学習態度」、「達成志向」、「自己評価」において、5類型間に有意な差が認められた(そ

表8 「盲従」における母子間の評価と学習意欲
(上段：平均値，下段：標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	15.50 2.12	13.53 3.71	11.00 2.79	11.55 4.08	12.79 3.05	F=1.99 +
達成志向	17.00 2.83	15.26 3.62	14.20 2.86	12.55 3.39	13.90 2.99	F=2.45 *
責任感	17.00 2.83	16.06 2.52	15.10 2.18	16.18 1.33	15.62 2.19	
従順性	15.00 0.00	15.88 3.19	15.10 2.60	14.00 4.36	14.68 3.04	
自己評価	13.50 4.95	15.47 2.79	14.10 2.69	15.09 1.97	14.12 2.57	F=2.16 +
失敗回避傾向	9.50 0.71	11.47 3.46	10.20 2.86	11.45 4.08	10.19 2.66	
持続性の欠如	11.50 2.12	12.56 3.33	12.90 2.73	13.00 3.66	11.66 2.98	
学習価値観の欠如	10.00 2.83	9.50 2.65	9.50 3.10	10.09 1.42	9.41 3.17	
P 得点	78.00 12.73	76.21 12.26	69.50 10.04	69.36 13.00	71.12 10.73	
N 得点	31.00 0.00	33.53 8.09	32.60 6.33	34.55 10.45	31.26 6.87	
総合得点	122.00 12.73	117.68 17.06	111.90 14.56	109.82 22.25	114.86 14.41	
人 数	2	34	10	11	146	203

+ p<0.10

* p<0.05

** p<0.01

*** p<0.001

(df=4,198)

れぞれ、 $F_0=1.99, 2.45, 2.16$; $p<0.10, 0.05, 0.10$; 全て、 $df=4,198$)。また、有意な差の認められた要素において、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差(5%水準)が認められた。

「自己評価」: B群>E群。

表9は、「矛盾」(感情の自己統制ができないため、子どもの同じ行動に対して、ある時はひどく叱ったり禁止したりし、また、ある時は見逃したり奨励したりするなどの母親の子どもに対する気分的な態度)における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた(それぞれ、 $F_0=4.15, 4.65, 5.84, 6.10, 2.97$; $p<0.01, 0.01, 0.001$,

0.001, 0.05; 全て, $df=4,180$)。また, 有意な差の認められた要素において, ライアン法による平均対の比較を行った結果, 以下の類型間に有意差 (5% 水準) が認められた。

「失敗回避傾向」: B 群 > E 群。

「持続性の欠如」: A 群 > E 群, B 群 > E 群。

「学習価値観の欠如」: A 群 > B 群, A 群 > C 群, A 群 > D 群, A 群 > E 群。

「N 得点」: A 群 > D 群, A 群 > E 群, B 群 > E 群。

「総合得点」: A 群 < D 群, A 群 < E 群。

表 10 は, 「不一致」(父親と母親の子どもに対する考え方や態度に大きな差があり, 子どもは矛盾する両親の扱いに混乱し, 母親は不和や対立の調整できにくいなどの状態) における母親と児童間

表 9 「矛盾」における母子間の評価と学習意欲
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	10.67 3.08	13.28 3.18	12.24 2.99	14.67 2.35	13.13 3.21	
達成志向	13.00 4.56	14.30 3.23	13.65 2.55	14.33 2.69	14.51 2.94	
責任感	14.33 1.63	15.96 2.22	16.18 1.74	15.78 1.92	16.19 2.26	
従順性	12.67 3.08	15.72 3.39	15.18 3.00	14.78 1.86	15.26 2.71	
自己評価	12.83 1.47	14.62 2.70	14.59 3.12	14.44 2.60	14.40 2.74	
失敗回避傾向	10.83 3.87	12.04 2.87	10.41 2.87	9.44 2.24	10.15 2.77	F=4.15 **
持続性の欠如	14.17 3.25	13.09 3.39	12.35 2.85	10.67 2.60	11.17 2.90	F=4.65 **
学習価値観の欠如	13.67 3.56	10.00 3.11	8.29 2.59	8.56 2.24	8.90 2.59	F=5.84 ***
P 得点	63.50 12.19	73.87 10.37	71.82 11.40	74.00 8.73	73.49 10.76	
N 得点	38.67 10.27	35.13 7.64	31.06 6.75	28.67 5.63	30.22 6.48	F=6.10 ***
総合得点	99.83 22.40	118.74 13.35	115.76 16.42	120.33 13.30	118.27 14.29	F=2.97 *
人 数	6	47	17	9	106	185

+ $p < 0.10$

* $p < 0.05$

** $p < 0.01$

*** $p < 0.001$

($df=4,180$)

表 10 「不一致」における母子間の評価と学習意欲
（上段：平均値，下段：標準偏差値）

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	14.00 2.92	12.11 4.13	13.05 2.33	13.00 1.22	12.89 2.98	
達成志向	14.60 1.52	14.15 3.82	14.10 3.01	13.00 2.35	14.27 2.83	
責任感	16.40 1.14	15.70 2.40	16.05 1.85	14.20 2.86	15.86 2.27	
従順性	14.80 2.77	15.56 3.58	15.35 3.88	15.40 2.88	14.92 3.00	
自己評価	14.80 2.05	14.89 2.99	14.30 3.47	14.20 2.17	14.34 2.57	
失敗回避傾向	11.00 3.32	12.96 3.41	10.75 2.79	9.20 2.17	9.98 2.46	F=7.38 ***
持続性の欠如	12.00 1.41	14.85 3.43	12.90 2.94	13.40 2.07	11.17 2.79	F=10.2 ***
学習価値観の欠如	9.20 3.56	11.52 3.18	9.85 2.76	9.00 2.35	9.03 2.50	F=5.07 ***
P 得点	74.60 7.02	72.41 12.60	72.85 11.01	69.80 8.67	72.27 10.41	
N 得点	32.20 6.98	39.33 6.83	33.50 6.51	31.60 2.88	30.19 5.80	F=13.4 ***
総合得点	117.40 11.33	108.07 13.91	114.35 12.98	113.20 10.35	117.08 14.35	F=2.40 +
人 数	5	27	20	5	132	189

+ p<0.10
* p<0.05
** p<0.01
*** p<0.001
(df=4,184)

の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=7.38, 10.2, 5.07, 13.4, 2.40$ ； $p<0.001, 0.001, 0.001, 0.001, 0.10$ ；全て、 $df=4,184$ ）。また、有意な差の認められた要素において、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差（5%水準）が認められた。

「失敗回避傾向」：B群>C群，B群>D群，B群>E群。

「持続性の欠如」：B群>E群。

「学習価値観の欠如」：B群>E群。

「N得点」：B群>C群，B群>D群，B群>E群。

「総合得点」: B群 < E群。

4. 考 察

表1の結果より、「不満」における母親と児童間（以下、親子間）の評価の様相は、特に学習意欲を抑制する側面の要素において影響に差が認められた。その中から、まず、親子間の評価がともに適応型（以下、E群）の児童は、それがともに不適応型（以下、A群）の児童よりも学習意欲の高い（抑制傾向の低い）ことが明らかにされた。また、E群の児童は、親子間の評価に違いがあつて児童の方の評価が不適応型（以下、B群）の児童よりも学習意欲の高い（抑制傾向の低い）ことが明らかにされた。表2の結果より、「非難」における親子間の評価の様相は、学習意欲を促進する側面の要素の一部と抑制する側面の要素において影響に差が認められた。その中から、E群の児童は、A群・B群の児童や親子間の評価がともに中間型（以下、C群）の児童よりも学習意欲の高いことが明らかにされた。また、親子間の評価に違いがあつて児童の方の評価が適応型（以下、D群）の児童は、A群・B群の児童よりも学習意欲の高い（抑制傾向の低い）ことが明らかにされた。ところで、この2領域の母親の養育態度は、子どもに対して、愛情があつても、子どもが愛情を拒否されたと勘ちがいしやすい態度、すなわち、愛情演出の様子を評価するものであった（品川ら、1972²⁰⁾。以上のことから、親子間の評価の一致・不一致にかかわらず、児童が母親の愛情の演出を拒否されたと勘ちがいせずにとらえることのできることで、学習意欲を促進させ、抑制傾向を低減する効果があることが明らかにされた。

表3の結果より、「厳格」における親子間の評価の様相は、学習意欲の促進傾向・抑制傾向の側面の要素の一部において影響に差が認められた。その中から、E群・D群の児童は、A群の児童よりも学習意欲の高いことが明らかにされた。表4の結果より、「期待」における親子間の評価の様相は、学習意欲の促進傾向・抑制傾向の側面の要素の一部において影響に差が認められた。その中から、E群の児童は、A群やC群の児童よりも、また、D群の児童は、A群やB群の児童よりも、それぞれ学習意欲の高いことが明らかにされた。この2領域の母親の養育態度は、子どもに対して母親の考え方を押しつけ、統制力・権力で子どもを支配しようとする、おとな本位の態度を評価するものであった。これらのことから、親子間の評価の一致・不一致にかかわらず、児童が母親の厳しさや期待・希望といったことをおとな本位の傾向の少ないものとして理解できることで、① 学習を進める際に、母親からの助言・援助を素直に受け入れ、② 学習における意志薄弱性の低減、③ 学習に対する反感や嫌悪感の低減といった点において、学習意欲の向上に効果のあることが明らかにされた。

表5の結果より、「干渉」における親子間の評価の様相は、学習意欲の促進傾向・抑制傾向の側面の要素の一部において影響に差が認められた。その中から、E群の児童は、B群の児童よりも学習意欲の高い（抑制傾向の低い）ことが明らかにされた。また、D群の児童は、E群の児童よりも学習意欲の高いことも明らかにされた。表6の結果より、「心配」における親子間の評価の様相は、学習意欲

の促進傾向の側面の要素において影響に差が認められた。その中から、B群の児童は、E群の児童よりも学習意欲の高いことが明らかにされた。この2領域の母親の養育態度は、子どもに対して世話をやき過ぎたり、心配し過ぎたりして、年齢以下の幼児扱いにする態度、いわゆる、過保護といわれることを評価するものであった。これらのことから、一部を除いて、母親の評価より、むしろ、児童の評価の方が、学習意欲の高低を規定することが明らかにされた。それは、母親の養育態度に対する児童の評価が適応群（E群）の場合には、それが不適応群（B群）の場合よりも、学習意欲の抑制傾向が低く、促進傾向も低いことに示されている。また、このことは、児童の評価が、学習意欲の促進傾向と抑制傾向の2側面に異なった作用をしていることを示していることにもなる。特に、その中でも、過保護な扱いに関して、母親の子どもへの態度を児童が過干渉・神経質・心配症と評価（B群）した場合、児童は、母親の態度に沿うために、① 自主的に学習目標や計画を立てて、自発的に学習したり、② 困難な課題に挑戦したり、目標ができるまでがんばったり、③ 母親からの助言・援助を素直に受け入れたり、④ 自分の力量を自分なりに評価したりするという点で、積極的に反応している。しかし、一方では、その態度に答えなければという意識から児童は、⑤ テストや学習について失敗することを恐れ、学習に集中できなかつたり、⑥ 強制されることがないと学習に取りかかることや継続して行ったりすることができにくくなるという傾向性も持っていることが、この領域の結果からは想定される。このことも含めて、今後さらに、過保護に関しては、詳細な分析・検討が必要と思われる。

表7の結果より、「溺愛」における親子間の評価の様相は、学習意欲の促進傾向の側面の要素の一部において影響に差が認められた。その中から、A群・B群・C群の児童は、E群の児童よりも学習意欲の高いことが明らかにされた。表8の結果より、「盲従」における親子間の評価の様相は、学習意欲の促進傾向の側面の要素の一部において影響に差が認められた。その中から、B群の児童は、E群の児童よりも学習意欲の高いことが明らかにされた。この2領域の母親の養育態度は、支配的態度が子ども本位で、子どもの要求に従い、子どもに奉仕し、しつけなどができなくなってしまうことを評価するものであった。これらのことから、児童の学習意欲の向上には、母親の養育態度が、子ども本位であることの方が有効であることが明らかにされた。このことは、前述の支配的態度が、おとな本位に関する領域の結果と基本的に逆転した対応関係にあることを示したものとなっている。しかしながら、子ども本位の態度は、学習意欲の抑制的な側面では有効な結果を見いだせなかった。また、一般に、子ども本位の態度は、子どもの情緒的な成熟を抑えたり、忍耐経験不足から自己統制力の欠如や無責任、協調性のなさというような自己中心的なパーソナリティの形成と関連づけられてきている。これらのことから、この領域の結果については、ケース数を増やすなど、詳細な検討が必要と思われる。

表9の結果より、「矛盾」における親子間の評価の様相は、学習意欲の抑制傾向の側面の要素において影響に差が認められた。その中から、E群の児童は、A群・B群の児童よりも、また、D群の児童は、A群の児童よりも学習意欲の高い（抑制傾向の低い）ことが明らかにされた。表10の結果

より、「不一致」における親子間の評価の様相は、学習意欲の抑制傾向の側面の要素において影響に差が認められた。その中から、E群・D群の児童は、B群の児童よりも学習意欲の高い(抑制傾向の低い)ことが明らかにされた。この2領域の母親の養育態度は、気まぐれで一貫性がなかったり、両親間の扱いや態度にひどい違いがあるということについて評価するものであった。これらのことから、親子間の評価の一致・不一致にかかわらず、児童が母親の態度に一貫性を認めたり、両親の考え方や態度に大きな差がないととらえることのできることで、学習意欲の抑制傾向を低減する効果のあることが明らかにされた。

5. 要約と結論

本研究は、児童の学習意欲の発達・形成に及ぼす母親の養育態度についての親子間の評価の様相について検討したものである。

母親の養育態度の「不満」、「非難」、「厳格」、「期待」、「矛盾」、「不一致」の領域では、親子間の評価の一致・不一致にかかわらず、各領域で問題傾向のある態度がそれぞれ少ないという児童の評価が、学習意欲の高いこと(向上)に寄与していることが明らかにされた。

また、「干渉」、「心配」の2領域では、児童の評価が、「適応=適応群(E群)」と「適応=不適応群(B群)」では、学習意欲の向上に、促進傾向と抑制傾向の2側面に逆の影響(促進傾向が高い: E群<B群, 抑制傾向が低い: E群>B群)を及ぼしていることが明らかにされた。

さらに、「溺愛」、「盲従」の2領域では、親子間の評価の一致・不一致にかかわらず、従来、問題傾向のある態度のひとつとして指摘されていた子ども本位であるという児童の評価が、学習意欲の向上に一部で寄与していることが明らかにされた。しかしながら、このメカニズムの詳細については、今後さらに、ケース数を増やすとともに、子ども本位という養育態度についての児童の認識の分析などからの検討が必要であると思われる。

付記: 資料の収集にあたり、各被験校の先生方、児童ならびにその母親の皆様の御協力をいただきました。また、有島俊一郎氏(現、テーエスデー株式会社)と平川睦美さん(現、鹿児島県志布志町立志布志小学校教諭)には、資料の収集・分析の過程において、御援助・御協力をいただきました。ここに感謝の意を表わします。

引用文献

- 1) 遠藤真由美: 中学生の学習意欲と親の養育態度; 関西学院大学文学部 1985年度卒業論文, 1986.
- 2) 藤田綾子・大前怜子: しつけに関する両親と子どもの認知構造における類似と相異; 実験社会心理学研究, 1978, 17(2), 111-120.
- 3) 藤田綾子: 親のリーダーシップ行動に関する相互認知の発達の变化; 日本教育心理学会第20回総会発表論文集, 1978, 294-295.
- 4) 林 保: 達成動機の理論と実際; 1967, 誠信書房.

- 5) 平川睦美：児童の達成動機に関する一研究；鹿児島大学教育学部 1986 年度卒業論文，1987.
- 6) 今林俊一・下山 剛ほか：児童における学習意欲の構造に関する研究 4；日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集，1981，516-517.
- 7) 前原武子：子どもの達成動機と子どもに対する親の期待との相関的研究；日本心理学会第 42 回大会発表論文集，1978，922-923.
- 8) McClelland, D.C.: *The Achieving Society*. Van Nostrand, 1961.
- 9) 宮本美沙子・岡野和子・依田 新：達成動機の育成とその規定因；日本教育心理学会第 10 回総会宿題報告，1968，61-88.
- 10) 村山久美子：両親に対する認知の発達 (1)；日本心理学会第 43 回大会発表論文集，1979，557.
- 11) 中原弘之：子どもの遊びと親子関係 (1)；日本教育心理学会第 20 回総会発表論文集，1978a，304-305.
- 12) 中原弘之：子どもの遊びと親子関係 (2)；日本心理学会第 42 回大会発表論文集，1978b，606-607.
- 13) 奥野茂夫：児童における達成動機の研究 (I)；日本心理学会第 32 回大会発表論文集，1968，78.
- 14) 奥野茂夫：達成動機に関する研究 (I)；山梨大学教育学部研究報告，1973，24，132-140.
- 15) 奥野茂夫：達成動機に関する研究 (III)；山梨大学教育学部研究報告，1978，29，138-145.
- 16) Rosen, B.C. & D'Andrade, R.G.: *The Psychological Origins of Achievement Motivation*. *Sociometry*, 1959, 22, 185-218.
- 17) 斎藤 謁：親の養育態度に対する子どもの認知に関する研究；日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集，1981，492-493.
- 18) 下山 剛・林 幸範・今林俊一ほか：学習意欲の構造に関する研究 (1)；東京学芸大学紀要 第 1 部門 教育科学，1982，33，129-143.
- 19) 下山 剛・林 幸範・今林俊一ほか：学習意欲の構造に関する研究 (2)；東京学芸大学紀要 第 1 部門 教育科学，1983，34，139-152.
- 20) 品川不二郎・品川孝子ほか：TK 式診断的新親子関係検査手引；1972，田研出版.
- 21) 鈴木乙史・東 洋：母子家庭の母親および子どもの心理学的研究 IV；日本教育心理学会第 22 回総会発表論文集，1980，426-427.
- 22) 塚野州一：子どもと母親の価値体系の関係について；日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集，1981，444-445.
- 23) Winterbottom, M.R.: *The Relation of Need for Achievement to Learning Experiences in Independence and Mastery*. In Atkinson, J.W. (Ed.): *Motives in Fantasy, Action, and Society*. Van Nostrand, 1958, 453-478.
- 24) 山本吉廣・辻岡美延：養育行動における親子間の認知差；日本心理学会第 41 回大会発表論文集，1977，692-693.